

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

思想としてのガンジス

著者	宮本 久義
雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究 Vol.10 別冊
号	10
ページ	41-48
発行年	2016-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00007987/

思想としてのガンジス

宮本 久義（東洋大学）

「思想としてのガンジス」というタイトルは前にどこかの出版社から出そうと考えていましたが、全然時間がなくて、まだまだ中身ができていません。一つは、今日のタイトルでもある「大地の思想」というものに対して大河の思想というかたち。ガンジス川という現実にある地理的なものですが、それを見つつ、人間のわれわれが思想をだんだんかたちづくっていく。また、かたちづくっていった思想が私たちの生活にいろいろな影響を及ぼしていく。昔、津田左右吉という人がそういうことを考えましたが、それと似たような、われわれの考えたものがまたわれわれの生活を律していく。そういうかたちでガンジス川が特にインドのヒンドゥー教徒には影響しているのだろうと考えています。

インド学、仏教学で中村元先生という先生がいらっしゃいます。中村先生がガンジス川というのは日本人にとっての富士山のようなものだ。富士山がどういう影響を与えているのかよくわかりませんが、私の母方の実家も富士山の見えるところなので、祖父が家をいろいろ改装したときに富士山の窓というものを、小さい家ですが、わざわざ富士山の見える窓を、本当に小窓ですけれど、つくっていました。なぜそんなに富士山が好きなのかと思うぐらいに、そこにいる人は好きなのです。富士山を見つつ生きていくというのが、インドの人たちの場合にはガンジス川がそういうところに当たるのかなと思います。

ヒンドゥー教とは

■ 開祖のいない宗教

紀元前1500年頃に西方からインド亜大陸に移動してきたアーリア人が信仰していた祭祀中心の宗教(バラモン教)を核にして、先住民のもつさまざまな民間信仰を融合して発展した宗教

■ 業と輪廻、解脱の思想

苦からの解放(解脱)は可能である

行為による方法: 祭祀などを行なう

知識による方法: 梵我一如＝大宇宙と小宇宙の照応

信愛による方法: 神様に対する絶対的帰依(バクティ)

■ 人生の目的

ダルマ(法)・アルタ(実利)・カーマ(性愛、優美)

■ 神観念

・あらゆる神は究極的には唯一の神の多様なあらわれであるという考えと、自分の崇拝する神が最高であるという考えがある

・哲学者たちは最高原理を追求する傾向があった。しかし庶民は神々を崇拝

・三種類の神を信仰してよい(村の神、家の神、自分の神)

ヒンドゥー教はいま、インド 12 億のうちの 8 割以上が信仰している宗教です。ですから 10 億人ぐらいにあたるのでしょうか。ところがわかりにくい。開祖がいない。また、バイブルのようなものにあたる聖典がない。それでなかなかわかりにくいものになっていますが、いまから 3500 年ぐらい前に西のほうからやってきた人たちが、アーリア人が中心になって、現地にいた人たちと民間信仰を融合して取り入れたものです。その中で、その後、『ウパニシャッド』という教典の中で業と輪廻の思想とか解脱の思想をかたちづくっていくわけです。

人生の目的のあたりは省略してしましますが、神様の観念はずっと続いていて、途中、ウパニシャッド時代とか、いまから 2500 年ぐらい前には哲学が、創造神を想定しない形而上学が発展します。これがいかにインドの思想の中心というか、中心にはなっているけれど、一世を風靡したような感じがしますが、実際は哲学者というのはいつの時代にも本当に少数なので、おそらくそういうものを考え出した当初は神様のいない形而上学はなかなか興味を得られなかったのだろうと思います。ですから、その間も神観念というものが続いていて、ウパニシャッド時代、その後の六派哲学という時代が流れ去るとまたまたヒンドゥー教が盛んになっていくというような流れになります。

- 家長主義と出家遊行主義
→ 四住期(学生期、家住期、林棲期、遍歴期)
- 3つの負債(リナ)
神・聖仙(リシ)・祖霊に負債を返す
- 浄と不浄の観念 → カースト制度

ここは省略してしましますが、家長主義と出家遊行主義についてだけお話ししておきます。五木寛之が最近よく本にも書いていますが、学生時代には学生。学びが終わると家に戻って結婚してしばらく過す。その後、林棲期と遍歴期を経て、この四つの時期を過ごしていくのがインド人の理想だと言われています。しかし実際にこの理想に従った人たちがどのぐらいい

たのかというと、本当に未知数です。なぜかという、いまから 2000 年ぐらい前に書かれたマヌ法典ですと、家住期から林棲期に移るところが、髪の毛が白くなって子供に全部託せるようになってから外へ出ていい。要は、うば捨て山ではないけれど、仕事あるいは子孫を残した後だったらいいということです。体のいい老後対策みたいになってしまっています。その意味での家長主義がインド人の、ヒンドゥー教徒にとっての理想ということです。

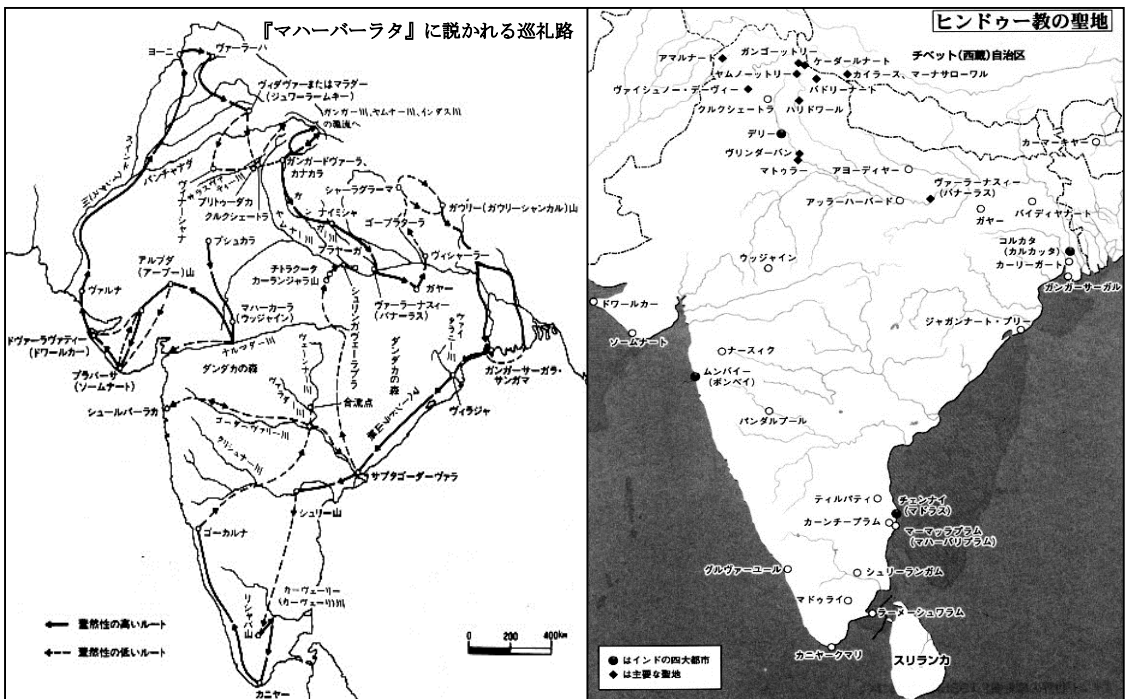
もう一つの出家遊行主義ですが、これはどこでも、学生の途中でいやになってしまったりしてどこかで出家したい。時期、場所を問わずに出家する人が昔からいたということです。ウパニシャッド時代に結婚しない症候群、あるいは結婚生活拒否症候群の男性たちが大量に出てきた。大量にといっても人数的にはパーセントは少ないけれど、仏教の開祖の仏陀もそうですし、ジャイナ教の開祖のマハーヴィーラもそうですが、子供がいたにもかかわらず出家してしまう。これがインドの出家遊行主義の一例になると思います。

インドの聖地

- 巡礼地は水と深く関係。インドの多くの聖地は川岸・合流点・海の岸边に発達した。
- サンスクリット語で聖地を表す言葉「ティールタ」は川の浅瀬などを意味する。
- 通俗的語源解釈では、此岸から彼岸へ渡る場所、すなわち天界に通じる場所である。
- 巡礼の道は神々の恩寵を得るために聖仙によって切り拓かれ、彼らを先達として叙事詩の英雄たちがその道をめぐり、さらに庶民が神々・聖仙・英雄の事跡をたどる構図になっている

このようなかたちで思想が進んでいきまして、いよいよ聖地のお話になります。ヒンドゥー教の聖地というのは、そういう出家遊行者を集めてだんだんできてくるのだと思います。最初に記述があるのはマハーバーラタとかそういうところ。仏教の聖地はもう少しと前にさかのぼって、アショーカ王という王様がいくつか回ったときに巡行地というか、そこができていくことがあります。

ヒンドゥー教の場合、マハーバーラタとかラーマヤナでして、そういう英雄たちが回ってその後、下のほうに書いてありますが、巡礼の道は神々の恩寵を得るために聖仙……。聖仙というのは聖者ですね。仙人によって切り拓かれ、彼らを先達として叙事詩の英雄たちがその道をめぐり、さらに庶民が神々・聖仙・英雄の事跡をたどる構図になっている。このように神話もだんだんできていくわけです。聖地という意味は、「ティールタ」というのは浅瀬というような意味でして、そこを通過して天界に通じる道。このような解釈が、通俗的な語源解釈がなされていきます。



マハーバーラタにはインド全土を回るような巡礼路もできていきます。マハーバーラタができあがったのは紀元後 5 世紀ぐらいですが、1000 年ぐらいかけてまとまっていったわけですから、いつごろまとまっていったのかははっきりわかりません。右回り、時計回りになっています。現代のヒンドゥー教の聖地、これも配布資料のほうに載せておきましたが、このようなかたちで北のほうのガンジス川の流域に非常に多いのです。その中で今日取り上げるのは聖地バナーラスです。ここは私が留学していた場所でもあります。シヴァ神という神様が自分の奥さんと住むのに一番ふさわしい土地を探して、そこに移り住んだ。聖地には分類がありますが、だいたい大きな聖地をグループ分けして七聖都とか三聖地とか、あるいは五十一の聖地とか、先ほどの大形先生のお話でもいろいろまとまっている、グループ分けというのがインドでもあります。そういう中でいくつものグループ分けの中に入っている重要な聖地です。

その中にいろいろな聖地がありますが、特に有名なのがバンチャクローシーというところ。だいたい 4 泊 5 日で回る巡礼路ですが、これは裸足で、着替えとか食べ物とか燃料などを頭に乗せて移動しているところ。これは途中で休んでいるところ。朝 2 時か 3 時ごろにスタートして、そんなに遠くないですから 10 時ごろには次のところに着く。そこで洗濯したり食べたりして、午後はそこにいるお坊さんたちの説教を聞いたりする。そしてまた早く寝て明け方というか、夜中に移動するみたいなことが普通です。私も何回か行きましたが、非常に楽しいところになっています。

これも資料に付け加えておきましたが、鉄道の線路が描かれています。いびつですが、円環状になっています。バナーラスのおもしろいところは一番外側、見えているところですが、そこをぐるっと 4 泊 5 日ぐらいで回って戻ってくる。その巡礼路の中で死ねば即解脱を得られるという思想をつくっています。これはとりもなおさず聖職者たちが自分たちの聖地に信者を集めたいために、要するに宣伝、広報活動をするわけです。それがいろいろな書物にもだんだん影響を与えていって、この場所は特別な場所である、ここに来れば悪人であってもいいというふうな考えになっていきます。それが、バナーラスが今の時代でもインドで一番重要な聖地とされる理由になっています。

次に水をめぐる古代インドの自然観です。日本のテレビでもよく出てきますが、沐浴場というのがあって年間何百万人という人が来る場所ですが、この川を見ますと、私も 7 年間、ガンジス川の見えるところに下宿していましたけれど、その水がだんだん汚くなってきた。そこでもう 1 度、水のことについて振り返ってみました。ガンジス川はいったいどうして汚れてしまったのか。ほかのところでもそうですが、もともと水というのはインドの精神文化の中で重要と言わ



モエンジョダロの大沐浴場

れています。いま画面に出ているのはモエンジョダロというところの、いまから 5500 年ぐらい前にできてきた、英語ではプールと言われているところです。でも、これは現在パキスタンにあります、よくよく考えてもプールで泳いでいたわけがない。なぜかという、類推でしかないけれど、インド人は泳ぎが下手です。

インドは日本の 9 倍ぐらいの面積がありますが、海岸線の長さを集めても日本の海岸線の長さの何分の一かです。三角形になっているので、ストレートなので、日本のほうが入り組んでいるので、海岸線は日本のほうがはるかに長いのです。海岸に住んでいる人もほとんど泳ぎません。漁師さんでも泳げない漁師さんがたくさんいるみたいです。ですから考古学者の人は、これは沐浴場であろうというふうなことを言っています。現在もこのようなかたちの沐浴場がありますので、昔からインドの人たちは何らかのかたちで聖水というふうなものを信仰対象にしているところがあったのだろうと考えられます。『リグ・ヴェーダ』という紀元前 1200 年ごろにまとめられたものの中でも、水というものが私たちの生命がかたちづくられるマトリックスになっているというふうな記述があります。ここは原初の水という考えです。primordial water というのがずっと『リグ・ヴェーダ』あるいは『アタルヴァ・ヴェーダ』の中に出てきます。

2) マトリックス(母胎)としての水

■ 『リグ・ヴェーダ讃歌』(前1200年頃編纂)

- 「そのとき(太初において)無もなかりき、有もなかりき。
空界もなかりき、その上の天もなかりき。
何ものか発動せし、いずこに、誰の庇護の下。
深くして測るべからざる水は存在せりや。
そのとき、死もなかりき、不死もなかりき。
夜と昼との標識(日月・星辰)もなかりき。
かの唯一物(中性の根本原理)は、
自力により風なく呼吸せり(生存の徴候)。
これよりほかに何ものも存在せざりき。」

『リグ・ヴェーダ讃歌』宇宙開闢の歌より

3) 天界の水・地上の水

- 『リグ・ヴェーダ讃歌』には英雄神インドラが天の水を支配していた悪蛇ヴリトラを退治して、堰を切って地上に水をもたらした、という讃歌がある。これは雨季の到来を語っているとも言われる。
- ガンジスが天界から降下する神話

その下のほうにガンジス川が天界から降下する神話というのがあります。これはちょっと端折ってしまいましたが、本当は端折ってはいけなかったところだったのかもしれませんが。ガンジス川は天界を流れている川だった。いろいろな物語を省略しますが、その川でしか死者が供養できないということが言われ出して、ガンジス川を何とか地上に降ろしたい。そこである豪族が何世代もかかってお願いしてようやくガンジス川を、これは女神でもあるけれども、女神がシヴァ神の頭を受け皿として天界から飛び下りる。そうでないとあまりにもショックが激しいということで、シヴァ神にもお願いして天から飛び下りてもらう。シヴァ神の頭をワンバウンドして、そこから地上に流れるというような神話があります。これによっていろいろ報われなかった先祖の霊が、罪障、罪、穢れが流されるとい

うことです。

この罪、穢れが流されるという考え方は極めて宗教的な考えです。しかし、仏教はそういうものは信じない。仏教はガンジス川の水に触れても、体の垢は流れるけれども罪障って何なの？ 罪障など、そんな川によって流れないでしょうというのが仏教徒の考え方です。ヒンドゥー教徒は、いやいや、そこで罪障は流れるんだと。そこらへんは同じ宗教でありながらもだいぶ違います。

この違いによって、仏教は外国に伝播していく。要は倫理的な面、論理的な面を持った宗教ですから、外国へ行く。方やヒンドゥー教はガンジス川とかヒマラヤ山とかそういう現実の地理的な要素も含めて、そこにあるものの信仰から離れない。外国に行ったらガンジス川はないですから、ガンジス川の水で罪障を浄化することはできません。そんなかたちでガンジス川信仰というのは、実際はインド内部にとどまるわけですが、逆にいうとインドの中では根強い信仰を集めます。仏教は 1203 年にインドの社会的な表面上から消え去ってしまいます。最後の残った僧院が 1203 年、イスラム教徒の焼き討ちに遭って、それ以降復活することはありませんでした。なかったということはインド人にとって仏教はいらなかったということです。しかし、ヒンドゥー教は同じように何百ものお寺がイスラムによって火をかけられて破壊されましたが、ヒンドゥーのほうはまた復活して残っていったことになります。

『ウパニシャッド』とかそういうものの中で、水というものはそういう意味でインド人にとっては昔からあるものであり、今に至るまで根強い信仰を得ているのです。そしてガンジスという言葉自体、ガンガーという言葉も現地の人たち、アーリア人の言葉ではなくて先住民の言葉としてしゃべられていました。それをローマ人など紀元前に来ていた人たちがガンゲージという名前でプトレマイオスの地図とかそういうものに載せていく。そして先住民の間で広がっていた水の潮解力、そういうものをアーリア人たちがだんだん受け入れていくわけです。そこに女神の崇拝ができるわけです。その川が汚染されている、なぜそういうことが起きたのかということを最後に付け加えておきます。

バナーラスという聖地に住んでいたあるお寺の管長、もうお亡くなりになってしまいましたが、ヴィールバドラ・ミシュラという人。この方は実はバナーラスヒンドゥー大学という大学の水力工学の教授でもありました。毎朝 4 時とか 5 時ごろに沐浴し、それから朝食を食べたりして大学へ教えに行っていたが、どうもガンジス川が汚いというので水質調査をしたところ、とてもじゃないけれど、ひどい値が出たわけです。そこで自分のお寺を主体として、サンカト・モーチャンというお寺ですが、財団をつくって清浄なるガンジス運動というものを開始します。ガンガーは私たちの母であって、私たちの保護者だ。私たちは池の中の魚と同じだ。池がどんなに汚れても魚はどこにも逃げられない。これはガンジス川から逃げられないヒンドゥー教徒の意見を代表しているような考えです。それで政府にも訴えかけていきます。

ガンジス川の汚染と浄化プロジェクト

■ 民間団体の取り組み

サンカト・モーチャン財団が、1982年に「清浄なるガンジス運動」を開始。

- 「ガンガーは私たちの母、私たちの保護者なのです。」
- 「私たちは池のなかの魚と同じです。池がどんなによごれても、魚はどこにも逃げられないのです。」

（代表者ヴィールバドラ・ミシュラの言葉）



ガンジス川でのゴミ拾い

政府に訴えかけるとどうなるか。そこで政府の取り組みです。ラジブ・ガンジーという前の首相ですが、この方は中央ガンジス川公共事業機関というものをつくり、浄化運動に取り組むことを考えます。これに JICA も援助します。しかしインドは、今でもそうですが、ほとんどのお金が汚職でなくなってしまう、実際には現地にほとんど行き渡っていません。それから JICA の人が来たときも、その人たちは政府の人たちと一緒に来る。このときに私は、留学が終わった後ですが、たまたまその場所にいて、来ていたのを知っていましたけれど、たとえばサンカト・モーチャンの人たちが会いたいと言ってもそちらには会わせない。なぜかという地元のお役人たちがそのお金を全部自分たちのものにしたいから。そういうことで真摯に取り組んでいる人たちの意見を聞かない。

では、民間の人たちはどうしているか。毎週ガンジス川の汚いものを片づける作業をしています。私も、ああ、そうなのかとしばらく思っていました、長く住んでいますと、これはおかしいと。インドでは一般のヒンドゥー教徒とアウトカースト、不可触民と呼ばれているヒンドゥー教徒にはかなりの差があって、一般の人たちはごみ拾いをしません。ごみ拾いをしていると周りの人たちに後ろ指を指される。おまえはアウトカーストと同じだといろいろな差別を逆に受けてしまう。ボランティア活動と言っていますが、この人たちは本当にボランティアなのか。聞いてみたら違います。このオレンジの人たちはアルバイト賃をもらって清掃しているだけの不可触民の人たちです。だから、ガンジス川の清掃運動というのは本当に難しいインド的な現状を抱え込んでいるわけです。

民間の取り組みと政府の取り組みがありますが、もう一つだけ政府の取り組みについてお話しします。この川べりには死体焼き場がありまして、24 時間、死体を焼いています。完璧に焼けている場合もありますが、だいたい焼けたところでそのままガンジス川に流してしまったりする。そこで政府は電気炉を造ったのです。焼き場は 2 カ所あります。これが 1 カ所目、これが 2 カ所目ですが、この 2 カ所目に電気炉を造りました。しかし、誰も利用しない。要するに、電気はいやだということです。これは私の写真です。ガンジス川でプカプカしていますが、後ろに流れているのはもちろん死体です。ここは浅瀬なので死体をイヌが食らっている。あまりいい写真ではないので飛ばしますが、こんな状

況がずっと、今でも続いています。私は雨期に川辺に座って数えてみましたが、3時間ぐらいの間に、人間+牛+蛇ということで30の死体が流れていきました。このように川はどんどん汚れているわけです。

政府の取り組み

- ラジーヴ・ガンディー元首相が「中央ガンジス川公共事業機関」設立
- ガンジス河川環境破壊の修復のために「ガンジス河行動計画」開始



ガンジス河畔にある電気火葬設備

おわりにということで、現代社会にインド精神文化が投げかける意味です。ガンジス川はなぜこんなふうに汚されてしまったのか。バナーラスというインド最大の聖地とされている場所でありながら、なぜなのかと考えたとき、聖地というのを美化してしまっているからなのではないか。ここは非常にいいところだと私たちは何の疑いもなしに暮らしているけれど、ここでの一番の排水はもちろん工場排水です。工場排水が一番ひどいわけですが、そのほかの生活雑排も入り込んでいますから、自分たちが気がつかなければそこは直せないのです。その直す手立てとは、当事者意識がなければ変わらない。では、その当事者意識はどうなのか。自分たちが汚してしまった。自分たちが崇めているがゆえに逆に見過ごしてしまった。そしてそれを自分たちがやろうとしたときには自分たちのカースト制度の壁にぶち当たる。このように一つの場所でいろいろなことをするのは難しいなというのが私の考えです。ガンジス川というものの重要性、そしてそこが今どういうことになっているのかという報告を終わります。